

氏名	佐藤 悅子 さとう えつこ
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第 1120 号
学位授与の日付	令和 6 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 デザイン学専攻
学位論文題目	竈を中心とする松花堂の空間構成と松花堂昭乗の造形理念に関する研究
審査委員	(主査)教授 中野 仁人 教授 櫛 勝彦 准教授 井戸 美里 京都女子大学 家政学部 生活造形学科 教授 *野口 企由

### 論文内容の要旨

本研究の目的は、慶長・寛永年間に数多くの著名人と交流を持った真言密教の僧である松花堂昭乗（1584～1639）が、生涯の帰着点であり終の棲家としたとされる八幡市男山の石清水八幡宮に位置する方丈松花堂の空間構成を、竈を中心とした意匠に焦点を当てながらフィールドワークと文献調査を通して詳細に分析することでその特徴を明らかにし、設計意図と創建時の姿を描き出そうとするものである。松花堂の意匠を特徴づけるものとして、仏間、丸炉、天井画と竈があげられる。中でも竈は正面玄関に入った一畳土間の左側に据えられ、際立った存在感を示している。本論文では、これまでほとんど触れられてこなかった松花堂の竈の造形性、特に竈の側面に施された 5 個の丸瓦の意匠的特徴とそれに関する資料を調査することによって、竈が誰の手でどの時代に設えられたのか、またどういった類の竈に属しうるのかについて探究している。さらに、創建当初は男山山頂に位置しながら、明治期の廃仏毀釈時に麓に移築され、現在は松花堂美術館の中に保存されている松花堂に関する資料を綿密に調査し、創建時の位置関係や室礼の様子を推定することを目指した。それにより、昭乗の造形理念の一端を推し量ろうとするものである。

第 1 章では、昭乗が生きた時代背景と人間関係について調査研究を行っている。昭乗と交流があり同時代を生きた佐川田昌俊の『松花堂行状』、昭乗の実兄である中沼左京の『中沼家譜』、近代に長年調査を進めた井川定慶の『隨筆松花堂』、さらに『男山考古録』、『京都府庁文書 明 7-23-1』などを詳細に分析し、当時の歴史的背景や親交が深かった人達と昭乗との関係性について、具体的にどのように関わり交流をしていたのかを検証した。

第 2 章では、現在の松花堂の玄関土間に備えられた竈の意匠が社寺や商家、民家の竈における意匠的類型の中で、どのように位置付けることができるのかを検証する。そのために主に近畿圏の 16 か所、31 基の竈の現地調査、検証をおこなった。その結果、竈を 7 つの類型「神仏型 I」「神仏型 II」「神仏併用型」「風雅數寄者型」「庶民型」「展示型」「嗜好型」に分類し、その機能と造形

的特徴を明らかにした。

第3章では、松花堂の竈について詳しい分析を進める。とくに竈の形状に加えて竈に嵌め込まれている丸瓦のメッセージ性を探究している。丸瓦の由来を検討することにより、昭乗の人間関係と創作の意図を推測する。また、松花堂の地理的経緯、移築された現在の松花堂美術館内の地理的状況を調査している。松花堂に関する最も古いとされる竈の平面図は、『茶室おこし絵図集第4集』に掲載されている文久時代の竈の製図「松花堂の土間の竈」であり、それについても探究している。

第4章で、松花堂の創建当時の姿を描きだすことを目的に、様々な資料や情報を組み合わせながら、まずは、全体的な室内意匠の考察を進めた。そして創建当時の松花堂の立地について、石清水八幡宮山上の東斜面に現存する松花堂の遺構の調査、『名物数寄屋図』中の『都林泉名勝圖會』に描かれている「松花堂全図」の前庭に関する説明文、佐藤虎雄の『松花堂昭乗』に言及された「待合の席」の存在、『男山考古録』「松花堂」の項にある泉坊からの移築に関する記述を関連づけることによって、創建当初は、現遺構よりも斜面内側にあり、少し右回転した状態で、北側の泉坊と待合の席を通してつながっていた可能性があることを示した。また、昭乗は、玄関土間の竈を調理目的だけでなく多目的に使用し、二畳間と水屋一畳半を仕切る1枚の襖の開け閉めにより日常生活と非日常生活である特殊な茶室空間を演出した。竈の前に立つと四畳半の松花堂の動線が見渡せる。そして室内の設計意図だけではなく、昭乗は室内と庭を一体化させ、小さな空間から広い世界を眺めるという手法を導入し、松花堂をサロンとして文化人の交流の場を築き上げようとしたことを類推した。

第5章は本論の総括、まとめとし、巻末に膨大な文献を翻訳した資料を添付している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、真言密教の大阿闍梨であり江戸時代初期を代表する書家三筆のひとりとして高名な松花堂昭乗に着目し、膨大な関係資料を詳細に分析したうえで、石清水八幡宮にあった松花堂の竈の造形性を探究している。また、現在は男山山麓に移築されている松花堂の創建当初の姿を類推し、昭乗が目指した造形の一端を明らかにしようとする研究である。

本論文には以下のように評価すべき点が存する。

第一に、松花堂昭乗はこれまで僧侶、書家、山水画・人物画の名人、そして茶人として評価され、作品や蒐集品をめぐる研究が多く展開されてきたが、松花堂の空間構成や、特に竈に着目した研究の例は類を見ず、独自の着眼点で調査を進めた研究であると言える。

第二に、創建当時の松花堂に関する記述や図録が掲載されている資料を中心に過去の論考を横断的に調査、比較分析し、現状の松花堂とその周辺環境の現地調査、先行研究の中には触れられていなかった行政文書などの資料の解読、松花堂の移設に關係してきた人々の親族、竈職人、社寺

関係者などへの地道な聞き取り調査によって得られた新たな情報の分析を加え、松花堂の立地から室内の詳細に至るまで創建当時の姿に関する独自の見解を提示している。

第三に、石清水八幡宮の山上の松花堂遺構を調査することで創建当時の松花堂の位置や周辺の建物との新たな関係を推測している。また、竈に嵌め込まれた丸瓦のメッセージ性と松花堂周辺の社寺との関係を読み解くことで、昭乗が目指した理想を洞察した点は極めて独自性が高いといえる。そのために広範かつ膨大な資料収集をおこなった上で、綿密に分析を進めるという手法は評価に値する研究である。

上記のように、本論文は歴史的、造形的に広範囲にわたる慎重かつ緻密な調査作業を踏まえて、独自の視点からの分析、考察を展開したもので、博士学位論文として十分評価に足るものである。

なお、本論文の一部は、いずれも以下の査読付の2論文としてすでに公表されている。

- ① 佐藤悦子、野口企由：「竈の意匠の多様性—社寺に係る竈の類型的分析—」意匠学会『デザイン理論』第77号21頁-34頁（2020）
- ② 佐藤悦子、野口企由：「松花堂の意匠—現状分析と創建当時の姿に関する考察—」意匠学会『デザイン理論』第82号7頁-21頁（2023）